

[論 文]

子どもの仲間関係研究の動向と展望

A Review of the Research on Children's Peer Relations

藤 田 文

Aya Fujita

ABSTRACT

The researches concerning the children's peer relations were reviewed and discussed in this articles. First the researches of the social problem solving and the social information processing were introduced. They tried to verify the Dodge's model of social information processing. The recent studies suggested that the aspect of the emotion and the motivation was added to the model. Second the researches of the interpersonal negotiation and the social interaction were introduced. For preschool children the social interaction is very important to examine the development of their peer relations. Further studies are necessary for the paradigm to find a better way for analyzing children's interaction according to many kinds of situations. Third the relation between the friendship and the interaction was discussed. The peer relations of the elementary school children are fixed more than those of the preschoolers. And the recent research reported that the status of sociometry were fixed among preschool children. Therefore it is concluded that the friendship should be differentiated from the peer interaction.

Key words : peer relations, peer interaction, social problem solving, social information processing

子どもの社会化の過程において、親子関係だけでなく仲間関係が重要な影響を及ぼすと考えられるようになり、子どもの仲間関係が注目されるようになった。また、いじめや引きこもりなどの問題の増加傾向からも、子どもの仲間関係における社会的能力の発達への関心が高まってきている。仲間関係に関する縦断的研究を展望したParker & Asher(1987)では、仲間関係の未熟さが後の社会的適応と関連していることが指摘されており、この点からも仲間関係研究の重要性が認識され、日本での研究も進展してきている。

このような傾向を踏まえ、本論文では、仲間関係の代表的な研究視点の現状をその方法論とともに概観する。仲間関係を研究する視点として社会性の多くの側面が取り上げられている。その中でも、社会的問題解決・社会的情報処理からの検討と社会的相互作用からの検討という2つの視点を取り上げ、その現状と課題、また相互の関連について考察し今後の課題を指摘していく。

1. 社会的問題解決・社会的情報処理からの検討

社会的問題解決場面・社会的情報処理からのアプローチでは、他者の意図や状況を適切に読み取り、状況の読み取りに応じて適切な解決方略を見出す社会的認知能力に焦点が当てられている(中

澤,2000)。近年、仲間関係の未熟な子ども達の対人場面における問題解決や情報処理過程についての研究が多く行われている。このアプローチでは、研究者によって仮定されるステップの内容や数は異なるが、その状況や相手の意図の解釈、可能な反応の検索、反応の評価などといったステップにおける処理の適切さによって行動を予測するという方法がとられている。

まず、Shure,Sipvack,& Jaeger (1971) やSpivack & Sure (1974) によって、社会的問題解決の考え方が提示された。仲間関係の調整においては、社会的なゴールを達成することが重要であり、ゴール達成のために、情報を正確に処理する能力、種々の視点を取る能力、活動の代替的プランを考える能力、社会的結果を予測する能力、結果を評価する能力が必要だと考えられた。この社会的問題解決の研究は、Dodgeら (1986) によって社会的情報処理の過程としてモデル化された。それを渡辺 (2000) が翻訳したものが図1である。このモデルでは、人は生物学的に制約された反応能力とデータベースをもっていることが前提となっている。社会的状況に直面すると、符号化、表象化、反応検索、反応決定、実行という5段階のステップを経て行動を産出すると考えられている。

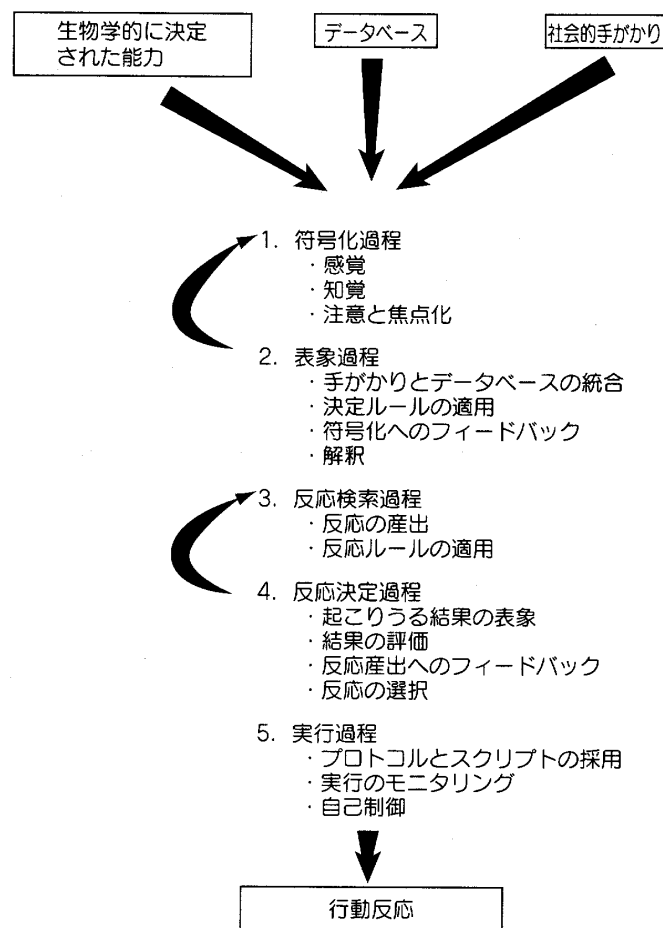


図1 社会的情報処理モデル (Dodge, 1986)

第1のステップは符号化の過程で、社会的手がかりに注意が向けられる。第2のステップは表象化過程で、注意が向けられた社会的手がかりを過去の経験によって作られたデータベースに統合し、解釈する。第3のステップは反応検索過程で、状況の解釈に基づき、その場面で行いうる行動レパートリーが個人の記憶の中から検索される。第4ステップは反応決定過程で、検索された行動の中から、最も適当な行動が決定される。適当な行動がない場合は、フィードバックループによって反応

検索過程に戻ることになる。第5ステップは実行過程で、決定された行動を実際に言語行為や動作に変換する。他者との相互交渉の中で、自分の行動の結果を監視し、もし、他者からの適切な反応が得られない場合は、それらの情報を手がかりに、新たに一連の情報処理が繰り返され、行動の調整が行われると考えられている。

このモデルのプロセスを取り上げ、仮設的な社会的問題解決状況を絵やお話やビデオで子どもに示し、子どもの反応を言語的に取り出す研究が行なわれた。Dodgeら(1986)では、仲間の挑発エピソードにおいて、被害者になったつもりで加害者の意図の解釈(加害者は敵意を持っていたか)、手がかりの使用(特定の手がかりに言及したか)、反応検索(自分ならどうするか、いくつの反応レパートリーを持っているか)、反応評価(加害者と被害者の次の行動について)、実行(どの反応をするか)などについて、子どもの反応を測定するといった方法が採用された。この方法と類似した研究が数多く行われ、モデルの妥当性が検討されてきた。特に、教師や仲間による社会性や攻撃性の評定値によって子どもを分類したり、ソシオメトリー地位を測定したりして、攻撃性の高い子どもと低い子ども、また、人気児と拒否児がどのような情報処理の特徴を持っているのかが明らかにされてきている。

このような研究によって得られた社会的能力の未熟な子ども(攻撃性の高い子どもやソシオメトリー地位の低い子ども)の社会的情報処理の特徴を表1にまとめた。意図の解釈、反応検索、反応の評価についての結果をまとめてみると、攻撃性の高い子どもやソシオメトリー地位の低い子どもは、意図の解釈が不正確で相手の意図を敵意と解釈しやすく、反応レパートリーが少ないだけでなく、相手の敵意の解釈に基づいてより攻撃的で不適当な反応をしてしまうという特徴が明らかにされた。

表1 社会的問題解決に関する研究結果

	攻撃児(低地位群)の特徴	文献
意図の解釈	<ul style="list-style-type: none"> 相手の意図の解釈が不正確 相手の意図を「敵意」と解釈 相手に「敵意」を帰属する 	Dodgeら(1984) Dodgeら(1983) Dodge(1980) Steinbergら(1983)
反応検索	<ul style="list-style-type: none"> 反応レパートリーが少ない 攻撃的反応が多い 反応の柔軟性が低い 反応が目標に達するまでの障害の認識が不正確 	Spivack & Shure(1974), Richardら(1982) Asarnow(1983) Rubinら(1983), Asher & Renshow(1981) Rubinら(1986), Dodge(1986) Pellgrini(1985)
反応評価	<ul style="list-style-type: none"> 有能な解決策をポジティブな結果をもたらすものと解釈しない 攻撃的な解決策や受身的な解決策をポジティブな結果をもたらすものとして解釈する 	Dodge(1986)

しかし、これらの研究のほとんどが相関研究であること、また、いざこざやストレスを含む状況でのみ子どものソシオメトリ地位による反応が大きくなる (Rubin & Krasnor, 1986) ことも示されており、地位の低い子どもの未熟さは限定的な結果としてとらえる必要があるだろう。

これらの結果をもとに、日本でも同様の児童期における社会的情報処理に関する研究が実施されている。濱口(1992a)では、仲間によって何らかの被害がもたらされ、それに対して応答する場面すなわち「挑発場面」を取り上げ、社会的認知と応答的行動の関連を検討した。小学4年生から6年生までを対象に質問紙調査を行った。社会的認知質問紙では、架空の挑発エピソードが3コマ漫画で示され、挑発状況の解釈、対人的目標設定、応答的行動の有効性判断の順に質問された。挑発状況の解釈では、加害者の敵対的意図の有無、援助的意図の有無、過失の有無について質問された。対人的目標設定では、友好的目標、主張的目標、敵対的目標について考えるかどうかを質問された。応答的行動の有効性判断では、乱暴や仲間はずれといった報復的行動と、理由を聞く注意を促すといった主張的行動と、無言や泣く行動が、各目標にとって有効かどうかを評定させた。その結果、社会認知の変数と応答的行動との重相関係数はすべて有意となり、その関係性が明らかになった。

さらに濱口(1992b)では、小学4年生から6年生の児童を社会適応のよい子どもと仲間から拒否されている子どもに分け、挑発場面における同様の認知と反応を比較した。その結果、仲間集団内で人気の低い子どもは高い子どもよりも敵対的で非友好的な目標を設定する傾向が強いことが明らかになった。この敵対的で非友好的目標設定は、相手に理由を尋ねたり注意を促したりする適切な応答行動と負の関係にあった。

これらの研究によって、具体的データのもとに、対人的目標、他者の意図認知と反応の関係が明らかになった。また、認知的側面とソシオメトリック地位に代表されるような仲間関係への適応との関連も明らかになっている。このようにDodgeの社会的情報処理モデルは、日本の児童においてもその妥当性が検証されつつある。

その一方で、社会的情報処理モデルは、機械的な処理過程を表しており、感情的側面が無視されていることが指摘され始めている。相川ら(1993)は、Dodgeのモデルに感情的側面と目標的側面を付け加えたモデルを提唱した(図2参照)。このモデルでは、第1に「対人反応の解釈」のステップがあり、それは、対人反応の知覚と対人反応の解釈と対人感情の生起という3つの下位ステップから成っている。Dodgeのモデルの符号化・表象過程とほぼ同一であるがその中に感情的側面が含まれている。つまり、対人反応の解釈の結果として一定の感情が生じると考えられている。そこで生じた感情が一つの動機づけとなって、第2ステップで「対人目標の決定」がなされる。例えば、怒りのような否定的感情は相手を攻撃するというような対人目標を決定させることになる。その後、第3のステップとして「感情の統制」がある。ここでいったん相手に対して生じた感情を統制してから、次に第4ステップとして「対人反応の決定」、そして第5ステップの「対人反応の実行」に至る。

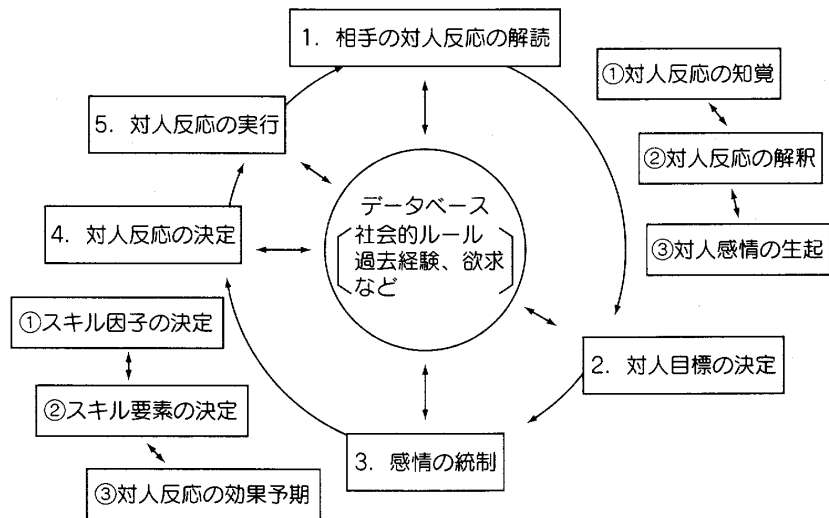


図2 社会的スキルの生起過程モデル (相川ら, 1993)

また、松尾・新井(1997)も、社会的情報処理モデルにおける限界として、子ども自身が目標を設定し、自分の行動を方向づける過程が軽視されていることを指摘した。つまり、子ども自身の目標設定と動機づけ要因、そしてその動機づけに関連する感情的側面を導入した相川らのモデルを支持している。この考えのもとに、社会的場面で喚起される感情と設定される目標が児童の社会的行動に影響を与えているかどうかを検討した。その結果、参入場面、孤立場面、過失加害場面の3つの社会的場面において、感情と目標が選択される行動に影響を及ぼすこと、感情や目標に合わせて選択される行動が異なることが明らかにされた。

さらに、Eisenbergら(1997)では、感情の統制や行動の統制が、その弾力性を媒介として社会的地位や社会的に適切な行動と関連しているという仮説的モデルを示し、それを検討した。否定的感情の持ち方、感情の統制、行動の統制、弾力性に関しては、親と教師に評定させた。また、社会的地位と社会的行動に関しては教師と仲間に評定させて測定した。各側面の関連を検討した結果、社会的地位や社会的行動は弾力性や否定的感情の持ちやすさによって調整されていることが明らかになった。また、Eisenbergら(2001)では、感情統制と子どもの内的・外的問題行動との関連についても検討している。この研究でも、感情統制のあり方が子どもの社会的問題行動を予測することが示された。従って、今後、感情統制を含めた社会的情報処理過程について明らかにされていく必要があるだろう。

2. 社会的問題解決・社会的情報処理の発達の視点

一方、Dodgeらによって提唱された社会的情報処理モデルでは、社会的能力の発達の部分があらわされていないという観点から、Selmanら(1987)が発達の側面も考慮したモデルを提唱した。Selmanは、対人交渉方略の発達として、対人的葛藤を解決する方向と自他の欲求をいかに考慮できるかという社会的認知発達の両方の観点を組み込んだ発達モデルを提唱している。対人交渉方略には他者を変える他者変容方略と、自己を変える自己変容方略があり、それぞれ社会的視点取得能力の発達応じたレベルがあるとされている。Selmanらの研究においてモデルの妥当性が検証されてきている(Selman,et.al.,1986; Beardslee,et.al.,1987)。このモデルは藤田(1992)で既に紹介されているが、この時点では、まだモデルの妥当性について日本ではほとんど研究がなされていなかった。

その後日本の児童でも、社会的状況が提示され、このモデルに基づく子どもの認知発達が検証されつつある。渡部（1993）では、小学1年生から6年生までを対象に対人交渉方略を検討した。その結果、学年が上がるにつれて対人交渉方略のレベルが高くなること、また、対人志向スタイルについても協調的志向が多くなることが示された。従って、日本の児童においてもSelmanらの対人交渉モデルはあてはまると考えられる。また、男子よりも女子の方が対人交渉方略のレベルが高いこと、対人志向スタイルについても男子よりも女子の方が対人調和を志向したスタイルが多いことが示された。渡部(1995)では、さらに、小学2、4、6年生を対象に同様の手続きで人気児と非人気児の対人交渉方略を比較した。その結果、人気の高い子どもは低い子どもに比べて対人交渉方略のレベルが高いことが明らかになった。山岸（1998）でも、対人交渉方略を測定するための質問紙が開発され、小学校高学年になるとほとんどの子どもがレベル2に達すること、また、男子よりも女子の方が発達レベルが高く、低レベルにおいては、男子は他者変化方略が多いが女子は自己変化方略が多いという性差も見られている。

これらの研究で、対人交渉方略の発達の变化が明らかになり、Selmanのモデルの妥当性も検証されつつある。しかし、対人交渉方略は、交渉の相手や交渉の場面といった状況要因によって変化することがほとんどの研究で指摘されている（Selman,et.al.,1986；渡部,1993,1995；山岸,1998）。従って、さまざまな状況要因が対人交渉方略に及ぼす影響を体系的に検討していくことが今後の課題となっている。

3. 幼児期の社会的問題解決に関する研究

社会的問題解決・社会的情報処理に関する研究は児童期の子ども達を対象にしたものがほとんどである。児童期の場合、社会的情報処理モデルの各ステップを取り出し、モデルの検証が行われてきた。その結果、前述のように児童期の社会的情報処理過程はかなり明らかにされてきているといえる。これに対して幼児を対象とした研究は、厳密なモデルの検証という観点ではほとんどなされていないという現状である。従来は、社会的問題解決場面における反応・方略の発達の变化に主に焦点が当てられてきた。最近の研究で、相手の意図認知との関係が示され始め進展が見られる。そこで、最近の日本での幼児期の仲間関係に関する社会的問題解決の研究を概観する。

幼児期の社会的問題解決に関する研究では、問題解決場面での反応に主に焦点が当てられてきた。東・野辺地(1992)は、幼児に仮設的な社会的問題解決場面を紙芝居風に提示し、その反応を求めた。この結果、3歳から4歳にかけて解決方略に量的発達が生じることが示された。また、3歳から5歳へと加齢に伴い、相手を傷つけるような反社会的解決や一方的に相手に合わせるような向社会的解決のように極端に自己を主張したり抑制したりするような方略ではなく、主張的解決や第三者介入的解決や消極的解決のような相手を傷つけずに自己の要求を満たす方略が増加することが示された。

また、同様に山本(1995a)は4、5歳児を対象に社会的問題解決場面における反応を自己調整能力という観点から検討した。その結果、身体的な攻撃による自己主張、言語的手段を用いない取り返しによる自己主張、他者依存的な自己主張は加齢に伴い減少し、説得による自己主張、協調的な自己主張は加齢に伴い増加することが明らかになった。つまり、非言語的で自己中心的な自己主張方略から、言語的で自他双方の要求を考慮した自己主張解決方略へと変化することが示された。

さらに近年では社会的問題解決場面での反応と相手の意図認知の関連を調べる研究が行われる

ようになった。片岡(1997)は、社会的情報処理モデルに基づき、5歳児の意図認知と反応の関連についてソシオメトリー地位を用いて検討した。その結果、攻撃児が非攻撃児に比べて相手の意図を敵意として解釈する傾向が強く、自分の被害が大きい場合に、より敵意に解釈する傾向が強くなることが示された。また、攻撃児は非攻撃児に比べて、報復的反応をすることが多かった。

同様に丸山(1999)は、社会的問題解決場面での反応と相手の敵意有無の関係を発達的に検討した。その結果、3、4、5歳児はすべて相手の敵意の有無を理解・認知していた。社会的問題解決方略は加齢に伴い非言語的・他者依存の方略から言語的主張・自立の方略へと質的に変化した。そして相手に敵意がある場合は、言語的主張方略が多いのに対して、敵意のない場合は言語的主張方略に加えて、消極の方略が多く選択された。

これらの結果から、幼児においても、認知的な意図の解釈が問題解決における反応と関連していることが示唆されている。さらに、小林(1993)では、社会的問題解決場面における幼児の反応と教師による社会性の評定とソシオメトリーとの関係を検討した。その結果、幼児の主張的な反応は教師評定による主張性と関連が見られた。また、前田・片岡(1993)は、仲間・実習生・教師による幼児の社会的行動特徴に関するアセスメントの結果がかなり一致しており、ソシオメトリック地位との関連も見られることを明らかにした。これらの研究から、幼児期においても、社会的情報処理過程という認知的側面と実際の場面の行動に関連がある可能性が示されてきているといえよう。しかし、子どもの実際の行動がどの程度安定的に出現するかどうかという点に疑問は残っている。

4. 幼児期の社会的相互作用に関する研究

幼児期の仲間関係の研究では、社会的情報処理過程の解明が課題となる一方で、社会的相互作用を重視した研究の必要性が高まってきている。前述した社会的問題解決や社会的情報処理の研究では、子どもの反応は状況要因に影響を受けることが指摘されている (Selman, et. al., 1986; 渡部, 1993, 1995; 山岸, 1998)。また、幼児の自由遊びの研究でも、状況によって遊びの質や内容が異なることが示されている (Killen, 1989; Pellegrini & Perlmutter, 1989; Irving, 1998)。特に、幼児期の場合は、行動の安定性や一貫性が低く、その時その時に移り変わる状況に応じて自らの行動を変化させていっている可能性が高い。このような観点から、子ども同士の相互作用過程の分析を重視するべきであるという主張がなされてきている。

無藤(1996)では、子どもの日常生活の文脈に降りて、そこに偶発的に描き出され創出される社会的相互作用過程での協同性そのものの始まりと維持を詳細に分析している。そして、1つ1つの協同的な問題解決の様子を詳しくみれば、常に相手との関係を協同的に保っているのではなく、様々に変化し、1つの時点でもいくつかの関係が層をなしていることを見出し、協同性の発達は1つ1つの協同の継起以外にはないのではないかと指摘している。子安・木下(1997)でも、他者との関係性、コミュニケーションの中で、すなわち精神間プロセスにおいて、心の理解に関わる日常的な現象を記述し直すことが当面の大きな課題となると述べられている。

これらの考え方をまとめる形で丸野(1998)では、自己と他者間の社会的相互作用のダイナミックな過程をモデル化している(図3参照)。このモデルは、子どもが個人的ゾーンと社会的協同性のゾーンを状況に依存しながら入ったり出たりする相互作用の展開を表現したものである。社会的相互作用の展開の中では、このように様々な関わり方のモードがジグザグ運動をしていく。従って、子どもがどの程度協同性のゾーンにいたのか、また、協同性のゾーンから個人的なゾーンを

吟味したかという体験が、子どもの社会的相互作用での展開を決定するといえる。ここでは子どもの社会的相互作用の過程は絶えざる相互調整をうけながら継時的に成立していくものであることを強調している。われわれの心的状態は一定のものではなく、常に変化し、揺らぎやすさを持っている。従って、他者との相互的な関係の中で進行しつつあるプロセスの中でとらえなおすことが不可欠である。

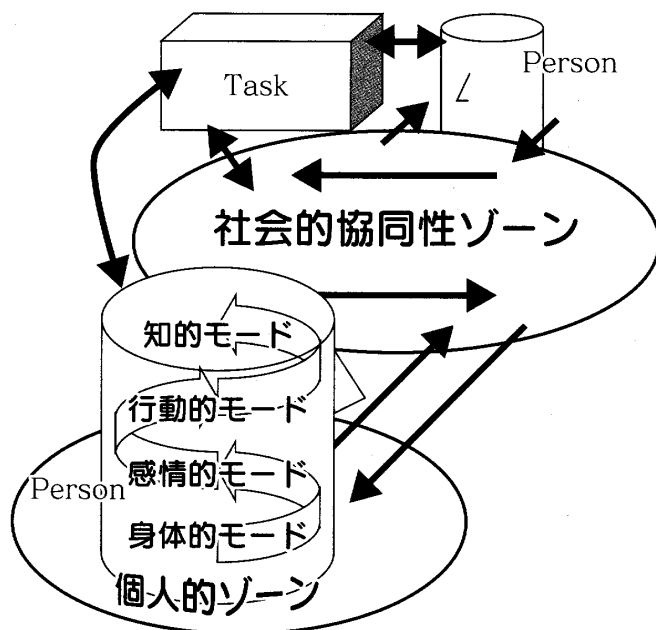


図3 個人的ゾーンと社会的協同性ゾーンとの間の
継時的出入りから成立する社会的相互交渉の展開 (丸野, 1998)

注) 関わり方のモードも状況依存的に変化していく

具体的には、幼児の相互作用をとらえるために、数種類の課題場面が工夫されている。遊具を提示して二人で遊ばせるがその内容は自由である場面 (阿南,1989; 阿南・山内,1989; 無藤,1996) や、1つの目標がある協力場面 (丸野,1998; 藤田,1998) や、ルールのあるゲーム場面 (栗山・荻原・足立,1996; 子安,1997; 藤田,1994,2000,2001) などである。それぞれの課題場面において自己と他者の相互作用過程が分析されている。これらの分析から子ども達は、細かい状況を読み取って、状況に応じて仲間との関係を調整して相互作用を展開させていることが明らかになりつつある。しかし、仲間関係に及ぼす状況要因が散発的に検討されているだけである。今後、相互作用過程の発達をより包括的に結論付けていくためには、状況要因の整理を行うことが必要である。交渉の相手 (親しい相手かそうでないか、友達かそうでないか、社会的地位が平等か地位差があるか、認知発達レベルが同レベルか異レベルか、同性か異性か) や、交渉の場面 (仕事場面か個人的場面か、目標が明確か不明確か、協力か競争か) や、交渉の物理的状況 (遊具の数、室内か戸外か、遊びの種類) など多くの要因が考えられるが、一つ一つの要因を検討し、関連付けていくことが重要である。

5. 子どもの仲間関係における関係性 (友人関係) と相互作用

幼児期から児童期にかけて仲間関係の発達に関する研究において相互作用過程の分析とそれに及ぼす状況要因の整理が必要であることが示された。この研究の進展の中で、今後子ども同士の

関係性（友人関係）と相互作用を区別していく必要があることが指摘されている（Fonzi,1997; Rubin,et.al.,1998 ;岡,1999）。相互作用過程は、子ども同士のある程度持続する社会的交換の過程である。友人関係は、子ども同士の相互作用から生じる比較的継続的な関係である。友人関係は仲間関係の限定された特殊な場合であるにとらえられ、相互的、親密的、情緒的、愛着的である。

従来、児童期中期に友人関係が比較的安定していき、行動という表層レベルでなく内面的で親密なレベルで相互性に基づいて営まれ、児童期後期にはより安定した友人関係が持続していくことが示されている（明田,1995）。従って、児童期では、仲間関係で行われた社会的情報処理や実際の行動が、継続的・固定的な友人関係へと影響を及ぼしていく。いったん攻撃的な子だと仲間認識されると、その評判から、仲間によって拒否され、仲間関係の経験が減り、社会性を獲得する機会を失うという悪循環に陥ってしまう（Asher & Coie,1990 ; 前田・片岡,1993）。このように児童期の場合、友人関係が固定化してくるので、仲間関係で形成された評判が将来の社会適応にまで影響を及ぼす可能性が高くなる。

また、最近の研究では、幼児期でもすでに友人関係が形成されており、ソシオメトリック地位はかなり持続的であることが示されている（前田,2001）。山本(1995b)では、幼児の親密性と既知性を厳密に分け、社会的問題解決場面での反応の違いを検討した。その結果、相手との親密性によって自己主張方略の出現が異なっていた。また、自己主張行動の有効性と自己主張の理由を検討した結果、高親密児との対人葛藤における自己主張には、それまでに形成されている過去の経験からの友情や信頼感があり、仲間関係の維持や修復が容易に行われていた。幼児期からすでに対人関係が安定していると自覚した時に、自分の欲求や要求を明確に主張することができ、自己主張によって問題解決を行うことができることが示された。このことから、幼児期からすでに、固定的な友人関係が仲間関係の調整に影響を及ぼしつつあることは明らかである。

このように相互作用過程で生じる仲間との交渉が、友人関係のレベルでの親密性の影響を受けている場合があるが、従来は、親密な友人関係と状況に応じた相互作用過程とが関連付けられることは少なかった。今後は、このような友人関係の側面（friendship）と相互作用（Interaction）の側面を区別しつつ、その関係性を考慮した上で、子どもの仲間関係の発達プロセスを明らかにしていくことが必要になってくるであろう。

引用文献

- 相川 充・佐藤正二・佐藤容子・高山 巖 1993 社会的スキルという概念について—社会的スキルの生起過程モデルの提唱— 宮崎大学教育学部紀要,74,1-16.
- 明田芳久 1995 児童の仲間関係の形成について—仲間選択の理由、仲間関係の分化度、および共感性との関係— 上智大学心理学年報,19,29-42.
- 阿南 文 1989 遊び場面における子供のルール共有過程 教育心理学研究,37,3,218-224.
- 阿南 文・山内光哉 1989 幼児の遊びにおけるルール共有過程の分析 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門),34,2,91-100.
- Asarnow,J.R. 1983 Children with peer adjustment problems :Sequential and nonsequential analysis of school behaviors. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*,51,709-717.
- Asher,S.R. & Coie,J.D. 1990 Peer Rejection in childhood. New York: Cambridge University Press. 山崎晃・中澤潤(監訳) 1995 子どもと仲間の心理学—友達を拒否する心— 北大路書房

- Asher,S.R. & Renshow,P.D. 1981 Children without friends:Social knowledge and social skill training. In R.Asher & J.M.Gottman(Eds.), *The development of children's friendship*(pp.273-296). New York: Cambridge University Press.
- 東 敦子・野辺地正之 1992 幼児の社会的問題解決能力に関する発達的研究—けんか及び援助状況の解決と社会的コンピテンス— *教育心理学研究*,40,64-72.
- Beadslee,W.,Schultz,L.,& Selman,R. 1987 Level of social cognitive development ,adaptive functioning ,and DSM-III diagnosis in adolescent offspring of parents with affective disorders: Implications of the development of capacity for mutuality. *Developmental Psychology*,23,807-815.
- Dodge,K.A. 1980 Social cognition and children's aggressive behavior. *Child Development*,51,162-170.
- Dodge,K.A. 1986 A social information processing model of social competence in children. In M. Perlmutter (Ed.) , *Minnesota Symposia on child psychology*. Hillsdale,NJ:Lawrence Erlbaum.
- Dodge,K.A. ,Murphy, & Somberg 1983 Assessment of intention-cue detection skills in socially deviant children. Paper presented at the World Congress on Behavior Therapy, Washington D.C.
- Dodge,K.A. ,Murphy,R.M., & Buchsbaum,K. 1984 The assessment of intension-cue detection skills in children: Implications for development psychopathology. *Child Development*,55,163-173.
- Eisenberg,N, Guthrie,I.K. Fabes,R.A., Reiser,M., Murphy,B.C.,Holgren,R., Maszk,P., Losoya,S.H. 1997 The relations of regulations of regulation and emotionality to resiliency and competent social functioning in elementary school children. *Child Development*, 68,2,295-311.
- Eisenberg,N, Cumberland,A. Spinrad., T.L., Fabes,R.A., Shepard,S.A., Reiser,M., Murphy,B.C.,Losoya,S.H., and Guthrie,I.K. 2001 The relations of regulation and emotionality to children's externalizing and internalizing problem behavior. *Child Development*, 72,4,1112-1134.
- Fonzi,A. ,Schneider.B.H. , Tani,F. and Tomada ,G. 1997 Predictiong children's friendship status from their dyadic interaction in structured situation of potential conflict. *Child Development*, 68,3,496-506.
- 藤田 文 1992 子どもの仲間関係調整方略に関する研究動向 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門),37,2,111-124.
- 藤田 文 1994 幼児のゲームルールに及ぼす物的資源の影響 山内光哉教授退官記念論文集,145-151.
- 藤田 文 1999 幼児の社会的相互交渉におよぼす課題モデルの効果 大分県立芸術文化短期大学研究紀要,37,71-78.
- 藤田 文 2000 幼児の交互交代行動に及ぼす課題の難易度の効果 日本心理学会第64回大会発表論文集,26.
- 藤田 文 2001 幼児の交互交代行動と出生順位 大分県立芸術文化短期大学研究紀要,39, 95-103.
- 濱口佳和 1992a 挑発場面における児童の社会的認知と応答的行動との関連についての研究 *教育心理学研究*,40,224-231.
- 濱口佳和 1992b 挑発場面における児童の社会的認知と応答的行動に関する研究—仲間内集団内での人気ならびに性の効果— *教育心理学研究*,40,420-427.
- Irving,K. 1998 The location and arrangement of peer contacts. *Children's peer relations* Slee,P.T. & Rigby,K.(Ed.)Routledge London and New York,165-182.
- 片岡美菜子 1997 攻撃及び非攻撃児の敵意帰属に及ぼすムード操作の効果 *教育心理学研究*,45,71-78.
- Killen, M. 1989 Context, conflict, and coordination in social development. L. T. Winegar (Ed.), In *Social interaction and the development of children's understanding*. New Jersey : Ablex Publishing Corporation.Pp.119-146.
- 小林 真 1993 幼児の対人葛藤場面における社会的コンピテンスの研究—人形を用いた実演反応と言語反

子どもの仲間関係研究の動向と展望

- 応による測定— 教育心理学研究,41,183-191.
- 子安増生 1997 幼児期の他者理解の発達—心のモジュール説による心理学的検討— 京都大学学術出版会
- 子安増生・木下孝志 1997 〈心の理論〉研究の展望 心理学研究,68,1,51-67.
- 栗山容子・荻原美文・足立実絵 1996 ビー玉獲得課題を用いた2人ゲーム遊び方略の発達 発達心理学研究,7,52-61.
- 前田健一・片岡美菜子 1993 幼児の社会的地位と社会的行動特徴に関する仲間・実習生・教師アセスメント 教育心理学研究,41,152-160.
- 前田健一 2001 子どもの仲間関係における社会的地位の持続性 北大路書房
- 丸野俊一 1997 幼児期における社会的相互交渉のメカニズムとその発達の变化 科学研究費補助金基盤研究 (B) 研究成果報告書 研究代表者阿久根求,1-12.
- 丸山(山本)愛子 1999 対人葛藤場面における幼児の社会的認知と社会的問題解決方略に関する発達の研究 教育心理学研究,47,451-461.
- 松尾直博・新井邦二郎 1997 感情と目標が児童の社会的行動の選択に及ぼす影響 教育心理学研究,45,303-311.
- 無藤 隆 1996 協同するからだごとことば—幼児の相互交渉の質的分析— 金子書房
- 中澤 潤 2000 子どもをとりまく人間関係 仲間関係 堀野緑・浜口佳和・宮下一博(編) 子どものパーソナリティと社会性の発達 北大路書房
- 岡 隆 1999 友人関係 橋口英俊・稲垣佳代子・佐々木正人・高橋恵子・内田伸子・湯川隆子(編) 児童心理学の進歩 1999年版 金子書房
- Parker & Asher 1987 Peer relations and later personal adjustment, are low-accepted children at risk? *Psychological Bulletin*,102,357-389.
- Pellgrini,A.D. 1985 Social cognition and competence in middle-childhood. *Child Development*,56,253-264.
- Pellegrini,A.D., & Perlmutter,J.C. 1989 Classroom contextual effects on children's play. *Developmental Psychology*, 25, 2, 289-296.
- Richard,B.A.& Dodge,K.A. 1982 Social maladjustment and problem solving in school-aged children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*,50,226-233.
- Rubin,K.H. & Daniels-Beirness,T. 1983 Concurrent and predictive correlates of sociometric status in kindergarten and grade one children. *Merrill-Palmer Quarterly*,29,337-352.
- Rubin,K.H. & Krasnor,L.R. 1986 Social-cognitive and social behavioral perspectives on problem solving. In M. Perlmutter(Ed.), *Minnesota symposia on child psychology*, 18,1-68. Hillsdale,NJ:Lawrence Erlbaum.
- Rubin,K.H., Bukowski,W., & Parker,J.G. 1998 Peer interactions, relationships, and groups. Damon,W. & Eisenberg,N.(Eds.) *Handbook of Child Psychology*,3,619-700.
- Selman,R.L., Beardslee,W., Schultz,L.H., Krupa,M.,& Podorefsky,D. 1986 Assessing adolescent interpersonal negotiation strategies : Toward the integration of structural and functional model. *Developmental Psychology*, 22,450-459.
- Selman,R. L. & Yeates,K.O. 1987 Childhood social regulation of intimacy and autonomy:a developmental-constructionist perspective. In W.M. Kurtines & J.L.Gewirts(Eds.), *Moral Development Through Social Interaction*. New York; John Wiley & Sons, 43-68.
- Shure,Sipvack,& Jaeger 1971 Problem-solving thinking and adjustment among disadvantaged preschool children. *Child Development*,42,1791-1803.

- Spivack,G. & Shure,M.B. 1974 The problem solving approach to adjustment. Washington.D.C.:Jossey-Bass.
- Staub,E. 1970 A child in distress : the influence of age and number of witnesses on children's attempts to help. *Journal of Personality and Social Psychology*, 14,130-140.
- Steinberg,M.D. & Dodge,K.A. 1983 Attributional bias in aggressive adolescent boys and girls. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 1,312-321.
- 渡部玲二郎 1993 児童における対人交渉方略の発達—社会的情報処理と対人的交渉方略の関連性— 教育心理学研究, 41,452-41.
- 渡部玲二郎 1995 仮想的対人葛藤場面における児童の対人交渉方略に関する研究—年齢、性、他者との相互作用、及び人気の効果— 教育心理学研究,43,248-255.
- 渡部玲二郎 2000 社会的問題解決能力の発達 堀野緑・浜口佳和・宮下一博(編) 子どものパーソナリティ—と社会性の発達 北大路書房,188-201.
- 山岸明子 1998 小・中学生における対人交渉方略の発達及び適応感との関連—性差を中心に— 教育心理学研究,46,163-172.
- 山本愛子 1995a 幼児の自己調整能力に関する発達の研究—幼児の対人葛藤場面における自己主張解決方略について— 教育心理学研究,43,42-51.
- 山本愛子 1995b 幼児の自己主張と対人関係—対人葛藤場面における仲間との親密性および既知性— 心理学研究,66,3,205-212.

付 記

本論文の一部は、平成14・15年度文部科学省科学研究費補助金(若手研究(B)):「幼児の仲間関係におけるルール産出と共有過程の発達」 課題番号14710113 研究代表者:藤田文)の助成を受けた。